

## 【資料】

## 第3回 東北地区高速育種運営会議及び

## 平成25年度 林業研究・技術開発推進東北ブロック会議育種分科会

黒沼 幸樹<sup>1</sup>

9月11日(独)森林総合研究所東北支所会議室において第3回東北地区高速育種運営会議(以下、高速育種運営会議という)及び平成25年度林業研究・技術開発推進東北ブロック会議育種分科会(以下、育種分科会という)が開催された。

高速育種運営会議とは、各育種基本区において当該基本区の場合等主催のもと平成23年度から開催されており、主に都道府県に対して次世代精英樹の開発状況やその性能について情報提供するとともに、次世代原種としての精英樹の取り扱いや普及に向けた課題について議論されている。

一方、育種分科会とは、旧林木育種センターと旧森林総合研究所の事業・研究に関する戦略が一本化されたことに伴い、「林木育種推進東北地区協議会」から名称を変え、育種種苗の開発・普及の推進を目的に開催している。林木育種推進計画の進捗状況の報告、関係機関からの要望事項の提案や情報提供が主な議題である。

平成25年度は、林野庁、東北森林管理局、東北育種基本区(以下、当基本区という)内の各県および関係機関ら30名が会議に出席した(写真-1)。

以下に議事の概略を報告する。



写真-1 会議の様子

## 第3回東北地区高速育種運営会議

東北育種場からスギ第二世代精英樹及びスギ雪害抵抗性第二世代品種それぞれの候補木から前者は10個体、後者は9個体確定する予定であると報告があった。

当基本区におけるスギ第二世代精英樹の原種配布については、他基本区と同様に公募で対象機関を選定し、配布対象機関から提出される第二世代精英樹利用計画書の審査に基づき配布方法を決定することが説明された。

また、改正間伐特別措置法が施行されたことに伴い、特定母樹(後述で詳しく説明する)について当会議で取り扱うことが提案され、了承された。

## 平成25年度林業研究・技術開発推進東北ブロック会議育種分科会

## (1) 林野庁からの説明

林野庁から、平成25年5月31日付で改正された間伐特別措置法(以下、特措法という)について説明があった。特措法では、森林の二酸化炭素吸収作用の保全と強化が目標に掲げられており、より成長に優れた育種種苗の確保が必要としている。

このため、様々な基準をクリアした品種を特定母樹として指定し、これまで公的機関のみで行っていた育種種苗の母樹の増殖を、特定母樹に限り民間事業者等でも行うことができるとし、この増殖事業に対する支援措置も講ずるとしている。特定母樹を増殖するためには、都道府県が認可した民間事業者等から申請を受け、森林総合研究所林木育種センターが原種を配布することとなっている。

民間事業者等が積極的に支援措置を受け、特定母樹から生産された種穂により優良な種苗が供給され、二酸化炭素吸収能力の高い森林が造成されることが期待される。

<sup>1</sup>くろぬま こうき 森林総合研究所林木育種センター東北育種場

## (2) 林木育種事業の推進について

### ① スギ・アカマツ第二世代精英樹の選抜等

当基本区で平成 23 年度から本格的に開始された次世代精英樹選抜育種事業において、スギではこれまでに 223 個体の候補木から採穂が行われ、クローン苗が増殖されていること、また、今後も選抜・採穂・増殖を進めていくことが説明された。

アカマツでは、成長が良くマツノザイセンチュウに抵抗性を持つ次世代品種を開発するために、60 個体の候補木から採穂が行われクローン苗を増殖しており、今後、マツノザイセンチュウ接種検定を行う予定であることが説明された。

### ② スギ雪害抵抗性品種の次世代化

当基本区内における各県のスギ雪害抵抗性ミニチュア採種園の造成状況（造成予定含む）と今年度山形県で、2kg 程度の種子が生産される予定である報告された。

スギ雪害抵抗性品種の次世代化に向けて、実生後代からの候補木選抜・採穂・増殖を進めるとともに、第二世代候補木間の人工交配を行い、第三世代品種を選抜するために試験地を造成する予定であることが説明された。

### ③ マツノザイセンチュウ抵抗性品種の開発

当基本区内における各県でのマツノザイセンチュウ抵抗性候補木の選抜状況及びマツノザイセンチュウ接種検定の実施状況（アカマツ 17 クローン、クロマツ 55 クローンについて二次接種検定を実施）について報告があった。

東北育種場では今後、アカマツについて母樹としての抵抗性及び種子生産性の評価に重点を置き、品種数の少ないクロマツについては、一次検定合格木の積極的な活用を関係機関に呼びかけていくこととしている。

### ④ 採種園の造成・改良・管理

各県の通常・ミニチュアタイプの採種園や採穂園の造成・改良状況、採種園への開発品種の導入状況、今後の造成・改良計画について報告があった。

大震災の津波被害を受けた太平洋岸の海岸防災林再生には大量の抵抗性クロマツが必要である一方、当基本区で抵抗性クロマツ採種園が造成されているのは宮城県のみである。現在、他県も抵抗性クロマツ採種園の造成に取りかかっている。

また、青森県・宮城県・福島県・宮城県農林種苗農業協同組合・東北育種場が参画し、抵抗性クロマツ種苗生産の向上に向けた研究にも取り組んでいる。

### ⑤ 原種の配布

平成 25 年度の原種配布の進捗状況、今後 5 ヶ年間の各県に対する種苗配布の計画について説明された。今後も、各県と連携・調整を図り計画的な配布に努めることとしている。

当基本区での抵抗性クロマツ採種園の造成は重要課題の一つである。しかしながら、植栽から雄花の着花までに時間を要することから、マツノザイセンチュウ接種検定一次検定合格木を用いた暫定採種園の先行造成を考慮した種苗配布計画書を提出するよう東北育種場から依頼があった。

### ⑥ 林木遺伝資源の収集・保存等

東北育種場から今年度における林木遺伝資源の収集・保存の進捗状況について報告があった。基本区は松くい虫被害の最前線であり、また、ナラ枯れ病も拡大しておりマツ類及びナラ類を中心とした探索・収集・保存の緊急性が高い。このため、関係機関に対して両樹種の林木遺伝資源の情報提供について東北育種場から依頼があった。

林木のジーンバンク事業の一環として取り組んでいる林木遺伝子銀行 110 番について、昨年度 3 樹種 5 件、同年度末時点で計 7 樹種 31 件が依頼者のもとに返されたことについて報告があった。

### (3) 各機関からの提案・要望事項について

近年、岩手県を中心に合板等への利用で需要が高まりつつあるカラマツに関する提案・要望事項が各機関から出された。

岩手県からは、カラマツ次世代精英樹の選抜や、育種基本区を跨いだ広域的な連携のために林木育種センターに対し研究の推進及び連携調整の依頼があった。

これに対し林木育種センターから、カラマツ次世代精英樹の選抜については、関東育種基本区において昨年度から取り組んでいること、カラマツ育種事業で重要な課題の一つである着花促進技術の開発に向けた研究を進めている等の回答があった。

また、種苗生産事業者等からのカラマツ種苗の供給要望や供給状況に関する情報提供があり、当基本区の青森・岩手・山形の各県では種苗の供給要望が多い、または要望が出始めているとの報告があった。

### (4) 各機関からの情報提供

東北森林管理局より同局管内におけるコンテナ苗の年度毎の植栽状況について報告があった。

また、同局管内における平成 25 年度までのブナの開花及び結実状況の報告がなされた。例年と比べ豊作と判断された調査箇所が多く、種子の結実についても期待できるとのことであった。